

ライフ
サポート

欠ける視野 運転に黄信号

緑内障の進行に伴う視野の変化の例



(注) 医師への取材に基づき作成

数百～数千円ほどだ。

とにつながる。國松副院長は「日常的に運転する人は一度眼科を受診してほしい」と力を込める。

特に患者数が多いのが緑内障。日本緑内障学会の調査によると、高齢になるほど有病率は高く、70歳以上では1割を超える。視野の見えない部分は一部分から始め、徐々に広がる。視野の中心部分の視力は保たれる場合が多く、自覚にくい。

「年をとると視野が狭くなる眼疾患が増える」と説明するのは西葛西・井上眼科病院(東京)の國松志保副院長。緑内障や網膜色素変性症では外側から視野が狭まり、脳梗塞では視野の半分が欠けることもあるなど疾患で症状は異なるといふ。

高齢ドライバーは注意すべきなにあまり知られていない目の病気が、視野障害だ。高齢者に多い緑内障などが原因で、視野の欠如や狭さなどで信号を見え落としたり飛び出しに気づくのが遅れたりする。視力は低下しないケースもあり、気付かずして運転を続けて事故を起こす危険がある。専門家は「運転をする高齢者は一度、眼科で受診してみてほしい」と呼びかけている。

「自覚症状」は5%極めて少なかった。

免許更新の際に受講する義務がある高齢者講習で、09年から視野検査を新たに加えた。検査結果が悪かったとしても免許取り消しにはならないが、加齢に伴う視野の変化などについてドライバーに自覚を促したり、運転者の状況に応じた指導を行ったりすることで、高齢ドライバーが安全運転できるように支援する。

ただ現任の検査は、左右に動く白い点が見える範囲の角度を測る「水平視野」測定のみ。水平線上で視野が欠けている部分の測定はするが、上下の視野の測定は余算項目ではない。

めだ。「『何か変だな』と思いつがら運転を続けてしまつことがほんんど」（國松副院長）といふ。

約1万人。視野検査を「受けたことがない」との回答は80・2%にのぼった。

が多い。しかし調査では「緑内障と診断されたら運動できなくなる・禁止される」と誤解している人が52・7%と過半数だった。健康診断や眼科での定期検診が緑内障の早期発見につながるのも「知らなかつた」との回答が41・9%あった。

中高年運転手、進まぬ検査

内障である可能性はない」など